



小説 神楽陽子

挿絵 高浜太郎

立ち読み版

第一章

決戦！ ホーリーハート対ナナコIIアストラル

第二章

勝手にセックス！ 祐一、童貞奪われる？

第三章

顔に塗るのは泥？ じゃなくて、スペルマ！

第四章

輪姦勝負！ 疼くカラダは誰のもの？

登場人物紹介

Characters



かしまみどり
鹿島 翠

天使の血を引く少女。ホーリーハートに変身して、悪魔を退治する。

ナナコ = アラストル

悪魔の少女。喜怒哀楽が激しく、子供っぽい性格。

まいき ゆういち
舞木 祐一

翠の幼馴染。気弱な少年。

そこで隠し持っていた翠の大胆な紐パンティを見せる。

「じゃあアタシともしよつ。アタシがママでユウイチが赤ちゃん。これがナプキンね」

ナナコは合計四本あるパンティの紐を、彼の両脇と両肩へと送って、肩の上で結んだ。下着の布地がちょうど彼の平らな胸元にやってくる。

「これね、ミドリが持ってたの。いやらしいでしょ」

「翠が……こ、こんなの穿いてるの？」

相当意外だったのか、祐一がパンティを見下ろして目を丸くする。ナナコは口元を緩ませると、手袋を挟んで大きな乳房を持ちあげた。

「ユウイチ、オッパイの時間でちゅよお？」

散々躊躇していた祐一だったが、恥ずかしいナプキンをつけられてふっきれたのか、おもむろに口を開く。そして上目遣いでナナコの指示を伺いつつ顔を寄せてくる。

「んふふ。あとは自分で持って……いっぱい吸ってね」

ナナコが手を離すや落下しそうになった乳房の、右側だけを慌てて拾いあげると、祐一は数本の唾液の糸で繋がった二枚の唇で乳首を挟み込んだ。男の子の熱く湿った唇が柔らかい乳首に唾液を塗り込んでくる。彼の吐息が乳肌にぶつかるたび背筋が震える。

「……んつ……こ、これでいいの？」

彼はよつぽど恥ずかしいのか瞳に涙を溜めていた。本当に吸引してしまっているのかど

うかわからないらしく、そのまま硬直している。そんな彼の性に対する初々しさが悪魔の娘によからぬ欲求を抱かせた。

(まだヘタッピだけど、上手にできるように調教してみるのも面白いかも!)

ナナコはまだ躊躇している男の子を揺さぶるため、わざとらしい声を放った。

「あん! ユウイチ、はあっ……」

「え? 苦しそうだけど大丈夫なの?」

祐一は女の子の苦悶の吐息に戸惑ったらしく、咄嗟に口を離してしまった。苦しいのはなく気持ちいいということをはっきりと教えてあげる。

「んもう。感・じ・て・る・の! ……ね、初めて触るオッパイはどお?」

それから祐一に乳房を揉んでみるよう指示をして、自分は彼の頭を優しく撫でた。純白の聖衣をまとっているせいか、本当に母親が赤ん坊をあやしているように見える。

赤ちゃん役の男の子は両手をいっぱい広げて右のおっぱいを揉んでいたが、初めての感触になかなか対応できないいらしかった。下方を掴めば乳の肉が上方に逃げるし、上方から押さえれば左右に広がる。

「うまく揉めないよ」

「いいの。好きなようにやってみて……そう、舐めてもみてね」

淫魔の精神はなかなか大きな快感を与えてくれない祐一の手にもどかしさを感じること

で、早く欲しいという欲求を徐々に強めていった。

(まだ動きが硬いなあ。もっと感じさせて欲しいのに……)

普段はすることのない正座のまま、大きな赤ちゃんの頭を撫でて囁く。

「ユウイチ、よおく聞いて。女の子ってね、エッチなことされればされるほど、気持ちよくなっちゃうのよ?」

母親役は子供役に多少大げさに説明した。

「されればされるほどって……ほんとに?」

「そうよお。それも強引にされるくらいのほうがいいの。女の子が言うんだから間違いないと思うでしょ?」

すると祐一は信じたのか、舌先で乳房の輪郭をなぞってきた。ゾクゾクとした快感が背筋を走り抜けて、茶髪のかかった両肩を小刻みに震わせる。待ちに待った性感で頭を撫でる手にも力が入った。

「あん! もっと……もっと強引にしなくちゃだめ!」

ナナコが彼の頭を手繰り寄せると、祐一はその気になったのか、さらに激しく舌を動かした。十本の指を乳房の片方に深く食い込ませて、前方に飛び出した乳輪の縁を舌でなぞってくる。

「ナナコちゃん、こう? はっ、んあっ」

だんだんと乳肌が彼の唾液と、ナナコ自身の汗で濡れていった。桃色の乳首が膨らんで祐一の鼻とぶつかる。もう彼の顔を乳房に思いきり埋めてしまいたい。ナナコは右手で祐一の頭を撫で、左手で空いたほうの乳房を手本とばかりに揉みながら、男の子がおっぱいを一生懸命舐めているのを眺めて興奮を高めた。

(ユウイチがオッパイ吸ってる……ほんとに赤ちゃんみたい。はあ……)

母性に目覚めたのか、右手からは力を抜いて彼の頭を優しく撫でた。性感帯を責められているのだから、ママゴトらしからぬ劣情も膨張する。赤ちゃん役の祐一は巨乳の三分の一ほどを唾液で濡らすと、今度は先端の突起物を咥え込んだ。上下の唇で乳輪を押さえながら乳首だけを吸引してくる。

チュウ、チュウ……という哺乳瓶を吸っているかのような音が鳴ると、少年は顔じゅうを紅潮させたが、おっぱいの味が気に入ったらしく、口を離すことはなかった。

「あん、そうよユウイチ……上手、ああん」

年頃の男の子に赤ん坊の真似事をさせている征服感。乳房の芯をまっすぐ引つ張られるような刺激がたまらない。ひとつでは満足できず、自ら左の乳首を摘んで切ない声をあげる。左の乳首も咥えて欲しくなる。

祐一に吸われていると、いままでに感じたことのない胸の高鳴りをふと覚えた。肉体的な経験はさておき、これまで恋愛をしたことのないナナコには、その甘い高鳴りの正体は

まだわからない。

(なんか……気持ちいい……)

一旦吸引を終えて口を離れた祐一は乳首の形状に目を丸くした。

「ナナコちゃん、ここ……大きくなってるみたいだけど」

唾液で濡れて鈍い光を放つ突起物は指のように太く、硬くなっていた。先端には乳腺の溝がくつきりと浮きあがっており、そこから祐一の唇まで唾液が糸を引いている。

ナナコはなにも知らない童貞少年に丁寧に教えてあげた。

「エッチなことしたり、考えたりするとね、女の子の乳首ってこんな風に膨らむの。ユウイチもあの写真見てたら、ち○ぽがおつきくなるでしょ？」

枕の傍には翠の水着写真が落ちている。オナニーを肯定したくはないらしい祐一は大げさに頭を振ると、今度は言われることなく乳責めを再開した。小さな手が乳房を掴むと乳首が向きを変える。

「柔らかいや……も、もう一回吸ってもいい？」

性交渉に否定的だったはずが、いまは積極的に自分の欲求をぶつけてくる祐一。

「いいに決まってるでしょお？ うんと音を立てて、しっかり吸うのよ」

彼は頷くと、小刻みに身体を震わせながらもまた乳首にしゃぶりついた。先ほど乳肌塗りに込んだ唾液と新しい唾液が混ざりあってチュパチュパと卑猥な音を立てる。乳首を吸

されると、乳房の芯ごと、聖衣の十字架模様を挟んだ付け根を引っ張られているような感じがした。性感帯で異性の能動的な舌の動きを実感しながら、純白のグローブをはめた右手で祐一の髪を繰り返し返し梳く。

「うん、そうよお……あん! ユウイチったら、はあっあ、上手!」

男の子に乳を吸わせ、あやすことによつて刺激される母性。相手が祐一であることによる不思議な幸福感も合わさつて、胸の鼓動が速くなる。同時に股間が疼きだす。もつと性感を得ようと思つて、相手の口に乳輪を放り込むくらい勢いで乳房を前方に押し出すと、思った以上の性感が乳房を越えて背中までを痺れさせた。

「はあ、ユウイチ、オッパイはこっちにもあるからね?」

すでに汗で濡れた左の乳房を持ちあげて、赤ちゃん役の男の子に差し出してみる。純白のグローブをはめた手のひらからいまにも零れそうな乳房に、興奮した祐一は頷きすら挟まず、子犬のようにしゃぶりついた。

「ナナコちゃん、んむっ!」

彼は早速唇を窄めて乳首を吸引した。ナナコが見下ろす中、頬を膨らませたりへこませたりしてしゃぶりまくる。片手では唾液で濡れた右の乳房で指を滑らせつつ、左の乳房を掴んで乳輪に熱い吐息を吐きかけてくる。

「はうっ、ナナコちゃん、んはっ、はあっおっばい、美味しいよ!」

祐一の言葉は正直になつていたが、まだ恥ずかしいらしく、顔は真つ赤なまま。そんな彼に、巨乳を支えている肩の力を乳首から吸い取られているような感じがする。ナナコは純白のグローブをはめた左腕で祐一の頭を抱き込んだ。

「夢中になつて……はあ、ユウイチつたらエッチね……はあん！」

眉尻をさげて青い瞳を潤ませる。嬌声を放つのに精一杯で口を閉じることができない。紫水晶のイヤリングを揺らしながら、彼の口に乳輪を押し込んでいく。ロングスカートの中では脚がしきりに動いて、熱くなりつつある股間部になんとか刺激を与えようとしていた。愛液の分泌が割れ目のすぐ内側で感じられる。

彼女は祐一が吸引する力を強めるたび、金具で囲われた腰をくねらせて彼の頭を撫でた。そして、今度は両方の乳房を同時に吸わせようと、ふたつの乳首を中央に寄せて接触させる。シンボルの十字架模様は胸の谷間に沈んでしまつてもう見えない。

「んはあ、ほらユウイチい。これでふたつ一緒に舐め、っあん！」

ナナコは指示の最中だったが、暴走気味の祐一は繋がった乳首をさつさと頬張った。突如の快感の発生に思わず呼吸が止まる。

「んむ！ はあつナナコちゃん、こうでしょ？ んあつ、はっんむ」

乾き始めていた右の乳首にも熱くて新鮮な唾液を塗り込まれた。勃起した乳首は相当に硬いはずだが、祐一の舌愛撫は凄まじく、勃起した乳首を右に左に倒される。先端を中央



に寄せているために乳房の付け根の外側が強く引つ張られて、痛みにも似た快感が走った。祐一は搾乳を忘れていたようだったので、彼の手のひら越しに自分で巨乳を揉んでしまう。大きく口を開いて喘いだので、顎が首元の金具と何度もぶつかった。

「んあ！ はあっ、ほら、オッパイもちゃんと揉んで、あん！」

相手の指の隙間に、グローブをはめているために真っ白な指を割り込ませて、彼の手ごと乳房を揉みくちやにする。やがて彼も自ら手を這わせるようになったので、巨乳は合計四つの手によって押されて、擦られて、指を埋められた。そのたびに胸の谷間の圧力が変化し、間に挟まれた聖衣が引つ張られて前垂れが角度を変える。紫水晶のイヤリングを揺らすその顔は、心地よい汗で濡れて、眉はすっかり「八」の字になっていた。

「好きだけ……あん、舐めてね」

ナナコは母性と征服感で身体の芯を熱くしたが、なにより複数の性感帯を同時にしゃぶられるのが心地よかった。祐一が二本の乳首を吸引すると、ふたつに結われた茶髪の間に見く背中を胸の側に引つ張られているような、奇妙な感覚が起こる。彼女はスカートの中で股間がヒクヒクと疼いているのを感じながら、わずかに絶頂に似た快感を両方の乳首で同時に覚えた。

「——ひあ！ はあ……ユウイチったらあ」

両肩の震えが止まって、乳房を揉んでいた手の指がピンと伸びる。瞳が潤んで、開い

た口から甘い吐息が漏れる。少年は彼女の硬直に気付かず、夢中で巨乳をしゃぶっていた。もう少し続けたい気持ちもあったが乳房を吸わせるのをおしまいにし、祐一の身体を離す。

「はあ……ユウイチ、上手だったよ。いっぱいチュウチュウしたね」

「あ、うん……な、なんか恥ずかしいや」

行為を終えるや羞恥で頬を染めて俯く男の子。彼が胸元にぶらさげている翠の紐パンティは涎でわずかに湿っており、穿いているパジャマのズボンはもっこりと膨らんでいる。一体どんな形状で、どんな味がするのだろうか。劣情が淫魔の口元を緩ませる。

(えへへ、しゃぶってあげたらユウイチ、どんな顔するかなあ?)

ナナコは巨乳にかかった茶髪をかきあげて、グローブをはめた右手で乳肌に付着した相手の唾液を掬うと、それを舐めてから祐一に新しい指示をくださった。

「じゃあ、今度はアタシが赤ちゃん役ね。ユウイチはお母さん!」

「お母さん? お父さんじゃないの?」

まだ俯いている祐一の顔を覗き込んで教えてあげる。

「今度は祐一がミルクを飲ませる番よっ」

少年は咄嗟に胸を隠したが、おかげで狙いの下半身が空いた。すかさずそこへ飛び込んでズボンを脱がせにかかる。

アルミ缶からはコポコポという液体の溜まっていく音が鳴って、酸っぱいにおいのする熱気が昇った。尿熱が尿道を通っていくたび、排泄感と性感がごちゃまぜになって金具で締められた腰を砕こうとする。放尿の音を聞いているだけで尖った耳が下に垂れて、エメラルド色のイヤリングが揺れ、その間では淫魔の顔が恍惚の笑みを浮かべていた。

（はあ気持ちいい、くる、キュウって……く、くるのよね？）

人前で尿を放つという、かつてない羞恥が肉体をこれまで以上に震わせた。この快感の向こうに昨夜のエクスタシーを直感する。やがて放尿の勢いが衰えて液体の溜まる音も小さくなって、代わりにうるさいくらいの拍手が辺りに響いた。オシッコに夢中で気付かなかったが、男の数がさつきより増えている。

最後の数滴は缶を外れてグローブにかかったが、翠はまったく気にしなかった。それよりも放尿を終えたことによる充足感で表情を蕩けさせている。淫魔の肉体は放尿だけどころなに感じるのかと、改めて感心する。しかし絶頂には至れず不満が残った。

（はあ、はあ……どうということかしら？ エッチなことをすれば、昨日みたいにアソコがキュウってすると思っただけ……）

彼女が尿で温かくなった缶を転がすと、男が慌てて道を開けた。中の液体で改札口の床が汚れて、熱気が立つ。

「すげえ、上手に入ったもんだな。慣れてるのか？」

「まあ格好からして、オレはやりまくってる女だと思ってたね」

翠はナナコの面子を潰してやったことよりも、疼く股間が気になって仕方がなかった。絶頂を迎えたくてたまらない。そこで彼女はふと、もつとエッチなことをすればエクスタシーを体感できるのではと思った。都合よく周りには股間をもっこりと膨らませた男がたくさんいる。

(そうよ、オシッコはエッチなことじゃないからだめだったんだわ。多分……男の人の……お、おちん○んが要るんじゃないかしら)

頭に浮かんだのはフェラチオだった。昨夜ペニスを舐めたとき、舌が蕩けてしまいそうなくらいの美味を感じた。それならエクスタシーに至れるはずだと思う。黒衣の淫魔はだらしなく口を開けると、また四つん這いになって周りの男たちに懇願した。

「ねえ……ミ、ミルク飲みたあい……クウン……」

汗ばんだ頬を目の前の男の脚になすりつけて、小さくクウンと鳴いてみる。無意識に尻尾と、お尻を振って、金具で締められた腰をくねらせて、漆黒のグローブをはめた手で相手のもう一方の脚を撫でもする。濃度の高い愛液が、元の位置に戻った股布を恥丘にへばりつかせた。

「お、おいまじかよ。ここで……しゃぶる気なんだな?」

前方の男がベルトに手をかけると、他の者も急いでジッパーを下ろした。前からも、右

からも、左からも、淫魔の痴態にあてられて七分ほど勃起した肉棒を向けられる。三本のペニスが彼女の目の前に並んで、残りの数本は背中のようにまわった。どの男根も健康的で、太くて長く、丸い亀頭をむき出しにしている。

(こんなにたくさん……で、でも……これなら……)

昨夜舌を蕩けさせた、あの牡肉の味を思い出すだけで唾液が分泌された。エクスタシーへの期待で股間が疼く。赤い瞳に映したいくつもの亀頭はとも美味しそうに見える。翠はナナコの面子を潰すためというより、自分の性欲を満たすために口を開いた。

「ね、ねえ……誰から……飲ませてくれるの？」

そう尋ねながらも、中央のペニスに狙いを定めて小さな鼻を近づける。試しに嗅いでみると独特の異臭で鼻の奥がツンとした。これがいい香りに思えるのは淫魔の身体だからと信じている。

翠は床に膝をつけたまま上半身を起こすと、唇を亀頭のすぐ手前へ持っていった。格好の割に姿勢は上品で、汗ばんだ太腿は隙間を挟まず密着しているし、漆黒のグローブをはめた手はとても優しく睾丸を撫でた。啞えることを意識したせいか、彼女の口内はすでに粘り気の強い唾液で充満している。

「それじゃあ……舐めちゃうぞ……んあ」

一度舌を八重歯に引っかけてから、ペニスの裏筋を上から下へと舐めてみた。髪飾りを

つけた頭を横に倒して、鈴口を舌の側面で押さえつつ熱い吐息を吐きかける。すぐに唾えようとはせず、頭の高度を上げ下げして竿を繰り返し舌でなぞった。

（舌がすぐくびりくびりする……やっぱりこれだわ）

陰茎の根っこに舌を押しつけてみると脈を打っているのがわかる。間近で嗅ぐ牡肉のにおいは頭の中に充滿していくようで、いやらしい想像ばかりが膨らんだ。そのイメージ通りにペニスに舌を這わせては、時折キスもして、わざと唾液を垂らして塗り込む。まだ勃起を完了していない陰茎を根元から曲げて、横笛を吹くように亀頭の付け根で唇を窄めた。「んっ……はぁ、どお？ 気持ちいでしょ、あっ、んっあ」

グローブをはめた右手では陰茎の根元を押さえながら、左手で男の脚を撫でる。すると相手の呼吸が次第に荒くなって、男根が急に反りあがった。上昇してきた亀頭に鼻をぶつけた翠が真紅の瞳を歪めて微笑む。

「あん、おつきくなっただあ」

膨らんだ亀頭に頬擦りしていると、男がブルブルと震えて困ったような顔をした。

「す、すげえ。ナナコちゃん……ほら、啜えてくれよ」

言われた通り亀頭を頬張ってみる。口の中で感じる陰茎の脈動はさっきよりもペースが速く、舌でいっぱいを感じる男根はとても熱い。その熱のせいか膨らんだ頬も紅潮する。淫魔の舌は亀頭をアメ玉と同じように舐めまわして、隙間なく口内粘液を塗り込んでいっ

た。昨夜のような照れがないだけに激しいフェラチオ。

「おお……すげえぜ。つはあ、上手いじゃねえか……毎晩やってんだろ」

突然覚えのない苦味がしたが、それはカウパー液だった。牡肉より美味しく感じられたが量があまりに少なく、すぐ唾液の甘味に混ざってわからなくなった。もつと出てこないかと思つて、頬をへこませて強烈に吸引してみる。その間も牝の舌は牡肉をしつこくしゃぶりまわして、相手の両脚を震わせた。

「なんだこのバキューム！　そうか、はあつ、悪魔ならではつてとこか……はあ、見ろよこの顔、美味そうにしゃぶりやがつて」

男の言う通り、淫魔の童顔はまるでキャンディーを舐めているように蕩けていた。さらに張りを増して大きくなつた龟头を小さな口の中で舐めるのは一苦勞で、舌が頻繁に頬の内側から膨らませる。カウパー液の苦味がわずかに生じると、舌から乳首へと甘い電流が流れていって、乳輪ごと硬くなつた乳首がボディスーツを押しあげもした。傍で見ていた男たちも我慢できなくなつたのか、次々と陰茎を近づけてくる。

「ナナコちゃん、オ、オレのも！」

「あん、そんなに焦っちゃだめえ……んあ、んっんむ」

翠はグローブをはめた両手でそれぞれ一本ずつ陰茎を握つた。そしてねこじやらしで遊ぶかのようにそれらを揉む。薬指と小指は伸ばしたまま、人差し指と中指と親指で輪を作

って、芯は硬いが表面は柔らかい肉棒を両方一緒に扱く。扱いているのは相手の性器なのに、扱けば扱くほど自慰のように自分の股間が気持ちよくなっていく。だから指にも力が入った。

「ん、んふっ……あむ、んっ、んあっ」

伸ばしていた薬指と小指を睾丸の下に潜り込ませて、今度はその袋を弾きながら、竿の根元を残った指で強烈に締めてみた。相手の陰茎が張って膨らみを増したら、竿からは離れて睾丸を揉みくちやにする。それを両手でこなしつつ、口ではペニスを頬張ってしゃぶった。口の中でまたカウパー液の苦味がしたので、左右の陰茎も同じ汁を分泌したのではと思つて鈴口を親指で擦ってみると、やはり先汁が漏れていて指が滑る。

「見てらんねえ！ オレのもしてくれよ、は、はやく！」

「うん……あむっ、順番らよお……んっはあ」

翠は中央の陰茎から一旦口を離すと、ずらりと並んだ亀頭を右から順番に舌で軽く愛撫していった。多くの男性が自分に夢中になっているという、相手が複数いなければ味わえない優越感が彼女の気を大きくさせる。彼女はふと、ナナコの面子を潰すという本来の目的を思い出した。

（まだだわ。これくらいじゃあ……はあ、噂になるくらいでないよ）

この際だから羞恥心をかなぐり捨てて、ナナコが二度とこの街を歩けないように痴態の

限りをさらす。ホーリーハートが思い浮かべたとはとても思えない、卑猥な言葉で男たちを煽って、自分も身体の芯を熱くする。

「んっんむ、ミルひゅまだあ？ はむっ……ああむ、おちん○ん……もつと、おちん○ん、おくちでビクビクしてえ」

忙しそうに右の、左の陰茎を頬張っては、熱い視線を相手に送ってペニスをしゃぶる。口淫が完了すればエクスタシーに至るのではという期待が彼女をもっと大胆にさせる。グロープをはめた両手は経験がないとは思えない動きで陰茎を抜いて、尻尾はちようど傍にあった別の男根を捕まえた。悪魔の尾が雁首を締めて引つ張る。

「ナナコちゃん、ミルク欲しかったらオレのも……お！ 言われるまでもないっつか、よしよし……おおっ」

翠は紫色の前髪でわずかに隠れた瞳をきらきらさせて、エメラルド色のイヤリングを前後に揺らしながら、順番にペニスをしゃぶった。ずっと啜えていないといけないという認識はなく、両手の男根も舐めにいく。

「んあ、このおちん○んも……あむ、美味しいよお。……こっちはあ？ んっああ」

右のペニスを舌でパンパンに膨張させてから、途中で胸元の宝玉に涎を垂らしつつ左のペニスに移る。右の牡肉を頬張ったときは右の乳首が、左の亀頭をしゃぶったときは左の乳首が、ペニスに合わせて硬くなっている気がした。自分の乳首を舐めたいという気持ち

を男根にぶつける。

「ナナコちゃん、オ、オレのはどう？」

「美味ひ、あむ……んふっう、はっあ……あっんむ」

尻尾がうねるのに合わせて尖った耳を上下にパタパタさせながら、翠は三本もの陰茎を順番に舐めていった。電流にも似た牡肉の味によって舌の感覚はない。本当に溶けてしまったのかとさえ思う。ところどころ涎が付着している爆乳を相手の太腿に押しつけて、睾丸を胸元の赤い宝玉に載せたうえで中央の陰茎をしゃぶりながら、尿道の中に残ったカウパー液を搾り出すくらいの勢いで左右の男根を握り締める。

輪に入ろうとして他の男もペニスを寄せてきた。ボンデー姿の美少女を中心に数本の男根が円陣を組む。一気に牡のにおいが強くなる。

「ナナコちゃん、はあっ、オレのも舐めてくれよ！」

翠は真紅の瞳にいくつもの亀頭を映すと、微笑んで、舌で目の前の亀頭をペタペタと舐めつつ頷いた。早速膝を浮かせて時計まわりにゆっくり回転を始めて、たくさんのペニスを唾液の糸で繋いでいく。

「はい……あふっ、もつと……んふ、お汁出ひてえ」

身体を回転させる際に股が開く。股間は粘り気の強い愛液でべっとり濡れており、太腿の間には何本もの糸が引いていた。ハイレグは黒いので、見た目には濡れているかどうかどう

かわからないが、股間ではプールからあがった直後の水着の感触がした。脚を動かすたびにめくれた陰核がボディスーツの裏地と擦れて心地よい。だからつい回転が速くなってしまうって、ペニスをしゃぶる速度もあがった。

「んっ、んふ……んむっ、は、はあ……ん、むふっ」

口だけでなく、漆黒のグローブをはめた両手や、尻尾でさえ頻繁に陰茎を入れ替える。両手では男根を掴むだけでなく、鈴口を押ししたり、睾丸を揉んだり、陰毛をかきまわしたりもする。ナナコの面子を潰すという当初の目的は忘却の彼方だった。眉尻をさげて瞳を潤ませ、頬をモゴモゴさせて口奉仕に夢中になる。

口を開いたまま、牡のにおいを楽しみつつ舐めていると、せっかく口内に溜め込んだカウパー液が唾液と一緒に零れて真下の宝玉を汚した。

「んあ、はあ……苦いの、もっと出して……お願い……」

一周したところで最初の男根を啜え込み、上目遣いで懇願する。

「よし、じゃあしっかり啜えてろよ」

すると前の男が淫魔の頭を両手で押さえて、口の中でペニスを前後させてきた。自分の予想とはまったく異なる動きをする牡肉に、昨夜のセックスを思い出す。男にペニスで突かれることでエクスタシーに至るのだと確信する。

（はあ！ これだわ、アソコが……熱くて……！）

粘り気の強い蜜がハート型のくり貫きから漏れて、すでに限界まで水分を含んだ股布を滑ってゆっくりと太腿を伝う。次の愛液はハイレグの外へ出てきても股から離れようとせず、水飴のように彼女の股間にぶらさがった。男の突き込みを爆乳で幾分妨げながらも、素直にイラマチオを受ける。痺れを切らせたのか、左右の男がペニスを握られたまま脚をじたばたさせ始めた。

「オレもしてくれよ、もう我慢できねえ！」

口内では舌で直接、手のひらではグローブの布地を挟んで肉棒の輪郭を知る。表面は柔らかいようで、芯はとても硬い男根ならではの感触がした。精液の味への期待が募る。今度は翠が痺れを切らせて、金具で締まった腰をしきりにくねらせていると、手前の男がふいにストロークを速めた。

「出るぞ。はあ、ミルクだつ、さあ吞め！」

「どくん！——どくん、どくん！」

口の中に、いままでにない異質な触感が広がった。それは先汁の数倍は苦味が強く、しつこいくらいドロリとして、ペニス以上に熱い液体。その汁が一度ではなく、二度、三度と口内で発射される。舌の感覚を失った翠は頬をモゴモゴとさせて、口内全体で精液の味を確かめた。顔じゅうがその汁の熱で真っ赤に染まる。

（これが……精子？ すごい……こんなに、美味しいなんて……）

美味しいだけでなく、全身を甘い電流が駆け巡っているような高揚感を覚えた。男根を握っている手の指が、ハイヒールブーツの中つま先が、ふたつの乳首が、特に痺れて、腰から力が抜けてしりもちをつきそうになる。舌だけでなく、肉体で感じる精液の味。

間もなくペニスを引き抜かれたが、もっと味わっていたかっただけですぐにザーメンを飲み込むことはしなかった。グローブをはめているために真っ黒な両手のひらを合わせて、唇から一塊になって零れてきた白濁液を受け止める。汚い色だろうとばかり思っていた精液は純白で、同じペニスから分泌される尿とはまるで違っていた。試しに嗅いでみると鼻の奥がほどよく痺れて心地よい。

(綺麗な色……あんなに美味しいんだもの、当然よね……)

漆黒のグローブの上に乗せた白濁液をしばらく見詰めていると、別の男がそこへ陰茎を寄せてきた。

「オ、オレのも見てくれよ！」

間もなくペニスがドクドクと脈打って、汁溜まりに子種を追加した。さっきは啜っていたのでわからなかったが、今回は射精中の陰茎をはっきりと見ることができるともいえる。先端を真っ赤にして、白く濁った大きな塊を小さな鈴口から頑張って発射する男性器は、とても可愛くて好感が持てた。

(こんな風にピクピクして出すのね。一生懸命で……なんだか可愛いわ)

両手の上で牡汁を流して遊んでみる。男性ふたり分だけあって、手を少しでも傾ければ零れてしまいそうなくらい精液の量は多い。翠は唇を窄めて、その汁をチュルチュルと大きな音を立てて少しずつ吸引した。飲み込むと、食道が重みのある汁と擦れて舌と同じように蕩けてしまった気がする。あらかた飲んでから、グローブをはめた指の隙間までを丹念に舐って残りの液も回収した。

「どうだ、オレたちのミルクは美味かったか？」

「は、はい……美味しいです……ねえ、もつと……」

早くも次の精液が欲しくなる。乳首がボディスーツの上からでもわかるくらい膨らんで、彼女が腰をくねらせるたび、ハイレグを食い込ませた股間がクチュクチュと小さな音を立てた。ナナコの真似を忘れていたが、男たちは快感に夢中になっているためか彼女の変化に気付いていない。まだ射精していないペニスを求めて振り返ると、予想以上の数の陰茎が口淫を求めてこつちを向いていた。

「こんな……はあ、いいんですか？ ——んむっ！」

相手の了解を待たずに一番中央にあった男根を咥え込む。そのとき弾力に富んだ爆乳がぶつかって口淫の相手を押しやっけてしまいそうになったが、口でペニスを吸引することで相手の身体を傍に留める。そして汚れたグローブをはめた両手で適当な陰茎を掴んでから、尻尾でも一本捕まえて、頬張ったものを舐めまわす。

「すげえな……さっきやったばかりなのに、もうしゃぶってんぞ」

「ん！ あっ、んむっ……！ んはあ、はっ、あむっ、んう！」

翠は男たちがなにを言っても口淫に集中した。頬張っている亀頭が限界まで膨らんでも、もっと膨張させるつもりでしゃぶる。何人もの男に囲まれてフェラチオしている自分がみつともなくて、恥ずかしくて、股間が火照る。分泌される愛液はとでも粘り気を増している、股間から落ちきってしまうことはなく、漆黒のハイレグと床が蜜で繋がるほどだった。我慢できなくなったらしい左右の男が、彼女の手を間に挟んで自ら陰茎を扱きだす。他の者も彼女に怒張を向けて一斉に自慰を開始した。

「もう我慢できねえ！ はあ、ナナコちゃん……オレも！」

グローブの布地越しに感じるペニスの脈動は速く、熱く、いまにも射精が始まりそうだった。口の中でも男根はビク、ビクと脈打ち、カウパー液を垂れ流していたので、翠の肉体もいやらしい汁ならではの苦味で興奮を高めていった。左右のペニスの真っ赤になった先端に負けないくらい乳首を勃たせて、ボディスーツの裏地を擦る。紫色の髪と逆さ十字を吊るした鎖を揺らす彼女の顔は全体が汗ばんでいて、口淫のために頬はもっこりと膨らんでいる。

「はあ、精子……出してください、あふっ、んむっ！ つはあ、んはあ」

翠は淫魔の肉体をもっと興奮させようと、頬張って、舐めて、しゃぶって、吸って、時



折涎を胸元の赤い宝玉に零した。金具で締められた腰をしきりにくねらせて、尻尾でも陰茎を抜いてやる。淫魔の尻尾は獲物を捕らえた蛇のように男根に巻きついた。

「あふ、熱い……あつ、ちゃんと……んあ、おくちに……出ひて、んっむ！」

相手にしているペニスの脈が速くなるのに合わせて胸の鼓動も速くなる。しゃぶる速度も一気にあがつて鎖がジャラジャラと音を立てる。ボディスーツから乳房がはみ出してしまいいそうなくらいの勢いで頭を前後させて、腰をくねらせて、ハイヒールの踵が愛液で滑ったらペニスを握った両手で身体のバランスをとる。

間もなく両手に握らされた男根も、尻尾で捕まえていたものも、男たちが自ら抜いていたものも、自分がしゃぶっていたものも、同時に精を放った。白濁したシャワーを全身で浴びる黒衣の翠。

どくっどく、どくっ！ どく！ どくどくっ！

どくっ！ どく、どくっ！ どく、どく！ どく！

黒衣の隙間に覗いた白い肌にも、わずかに黄ばんだ粘液がかかった。爆乳のやたら広い表面に、肩に、おへそに、太腿に、そして淫魔の童顔でも、額に、鼻に、頬に、顎に、連続して精液をぶちまけられる。胸元の宝玉や腰を締めている金具の溝にも汁が浸透して、背中の中の翼も汚れた。紫色の髪が濁った雫を垂らす。露出した背中や、ハイレグを食い込ませたお尻にも白濁液が付着していった。

「あっ……ああああん！」

全身を精熱で一氣に加熱されるのはたまらない快感だった。わずかに絶頂に似た感覚が膣内で生じて、太腿に付着した精液を洗い流すくらい大量の愛液を分泌する。精液は肌の至るところに浸透していったので、お風呂に入っているような感覚さえして、浮力で身体が上昇していくようだった。口の中に精液を残したまま呼吸を整える。

「はあ……はあ、はあ……はあ……」

呼吸がある程度落ち着いたところで翠は精液を飲み込んで、最後に喉で子種の感触を愉しんだ。しかし女性器が「キュウ」とするところまではいかず、脱力感と不満だけが残った。どうして果てることができないのか。残された選択肢といえばヴァギナセックスだったが、思考が白濁して、それが浮かんでこない。疼く秘部から新しい愛液が溢れて古い蜜を流していく。翠は白濁液で濡れた腰とお尻をしきりに振って、男の視線を集めたうえでおねだりした。

「はあ、はあ……私、気持ちよくなりたいです……」

女性より性にだらしのない男の人なら、もしかしたら果てるための方法を知っているかもしれない。もう中腰ではいられず、愛液や精液で汚れた床にお尻をつけてしまう。疼く股間をどうにかしてしまいたい、自分で触ってもエクスタシーはこないと思っていたので、股を開いて男たちに上目遣いで懇願する。

どびゅっ！ びゅっ！ びゅくっ！ びゆる！ びゆるるる！

肌だけでなく髪や黒衣にも白濁液をぶっかけられた。高熱を帯びる全身。肉体を外からも中からも精液で加熱されて呼吸すらできない。髪飾りの鎖の揺れが完全に止まるまで硬直し、やがてすべての陰茎を解放して脱力する。

しかし彼女はすぐに身体を起こして、蟹股になり、汚れたグローブをはめた右手で自ら割れ目を広げてみせた。どろりとした愛液と精液が零れて熱気を立ち昇らせる。

「はあ、もつと……ねえ、もつとしてえ？」

ナナコは涎と白濁液を唇から零して微笑んだ。そして適当な男の腹に跨って、かたっぱしからペニスを舐めていく。それから彼女は次々と男に射精をさせては、自らも絶頂を迎えて、白く濁った潮を噴くのだった。

ナナコに遅れて意識を取り戻した翠も、最初に大きな違和感を覚えた。頭がやけに重く、さつきより身体を動かしづらい。上半身を起こして自分の身体を確認して目を丸くする。青い瞳に映ったのは黒衣ではなく白衣だった。胸元の十字架模様は胸の谷間に沈んでいるので見えないが、金色で縁取られた前垂れや、純白のグローブ、極薄のロングスカートはホーリーハートのものに間違いない。

（私……元の身体に戻ってる？）

電撃が原因らしいことはすぐにわかった。ようやく元に戻ることができたことに安堵する。もうこれでナナコに勝手をされることも、肉体が疼くこともないと思う。

傍では、十数本ものペニスに囲まれてよがり狂っている黒衣のナナコが、全身を白濁させて恍惚の笑みを浮かべている。聖なる魔法使いにとっては忌むべき光景のはずだったところが、翠にはそれを嫌悪しようという気持ちが起こらなかった。

（あんなにおちん○んに囲まれて……う、うあつ？）

彼女は、自分の股間が強烈に疼いていることに気がついた。すぐにもロングスカートを捲しあげて秘部をまさぐりたい衝動に駆られる。まさかと、なにかの間違いだと思うのだが、腰が勝手にくねりだすくらい切ない。はだけた肩がガクガクと震えて、座っているだけで冷や汗が頬を伝う。口の中が強烈に乾く。

（ど、どうして……もう淫魔の身体じゃないのに……！）

さっきまで貞操帯によっておあずけを食らわされていた精神が、彼女の肉体を疼かせているようだ。割れ目だけでなく、肛門すらペニスを求めて開閉を繰り返している。乳首の勃起が収まらず、触らずとも勝手に乳房の芯を引っ張ってくる。

「はあ……はあ、んはあ……」

唇から漏れる吐息は、輪姦の最中にある淫魔のものに匹敵するくらい甘く、色を帯びていた。そんな彼女の傍へ早くもたくさんの男が集まってくる。聖学園の男子生徒だけな

く、駅で彼女が相手をした者もいた。

「鹿島さん、目が覚めたみたいだな。な、なあ、早く続きやろうぜ！」

「あっちの子みたいにさ。オレ、もう我慢できねえよ！」

翠は四肢を掴まれて、股を広げさせられたが、抵抗するための力がまるで出ない。わずかに肌を触られただけで電流のような快感が生じる。

「ち、ちよっと待ってください！ やめて……は、はああ」

股を広げるのは容易いのに、閉じることはどうしてもできなかった。男の手が離れても、荒い呼吸を繰り返すばかりで動けない。翠は前垂れとスカートをめくられて、ぐしよぐしよに濡れたパンティを右に寄せた秘部を数人の男に観察された。

さっきまでナナコがセックスに使っていた女性器は、陰唇から陰毛の先に至るすべてがドロドロになっており、精液のにおいを強烈に漂わせていた。触られずとも割れ目がヒクヒクと疼いて、分泌されたばかりの愛液を零す。赤く腫れあがった陰核はほとんど上を向いており、その根元には茶色の陰毛が絡まっている。

「いや、はあつ、み……見ないで……！」

そんなところを覗き込まれているのだからたまらなく恥ずかしい。なのに、もつと見せたいという気持ちも起こって肉体が勝手に疼きだす。ついペニスの存在を気にして、蜜壺への男根挿入を意識すると、胸がとても高鳴った。いまの翠には、何本ものペニスに囲ま

れて喘いでいるナナコが羨ましくて仕方がない。

(うそ……私はホーリーハートなのに……し、したいなんて)

自分もペニスを挿入して欲しい。精液を被って熱くなりたい。そんな劣情が理性をどんどん追い詰める。翠の精神は首を振って抗おうとしたが、肉体はそれをしようとせず、素直に股を開いて男根を受け入れてしまった。ずぶずぶずぶ、と肉を割られる感触。

「——っああん！」

淫魔の肉体でセックスをしたときと同様の快感がホーリーハートの脳天を突きあげた。ナース帽をかぶった頭が後ろに傾いて茶髪が波打つ。いま自分はホーリーハートとしてではなく、鹿島翠として同じ学園の男子生徒に犯されているというのに、それがどうして問題なのかわからない。どうでもよくなってくる。ジンジンしてならないお腹の奥に怒張が到達したとき、翠の理性は底に孔の空いた船のごとく、悦楽の海に沈んでいった。

「はああ……！ あん、気持ち……いい！」

どうして感じてしまうのかわからないまま、どうせなら腰を振ろうと、相手の上に跨ってしまふ。そして純白のグローブをはめた手で相手のお腹を撫でながら、ナナコに負けないくらいの勢いで腰を振りまわす。

「っああん！ あん、あん！ あ、あん！」

実に上手に子宮を怒張にぶつけては、甘い声で男を煽った。純白のブーツの裏で時折男

の脚を踏んだが気にもせず、ひたすら己の性欲を満たすためにより狂う。ナナコの精神があらかじめ肉体を高ぶらせてくれていたおかげもあって、肩や膝にちよつと異性が触れただけで甘い電流が生じる。

「はあ、きて……はあ！ 私も、あの子みたいに……してくださあい！」

彼女が肛門の高度をあげると、背中側にまわり込んだ男がスカートと後ろ垂れをめぐり、さらにパンティの尻布を右に寄せて菊門を暴いた。糸くらいなら通せそうな褐色の孔に怒張が突っ込んでくる。前の孔にすでに男根が収まっているために、股部の肉が張っているところへ、もう一本強引に挿入される。

「すごい……気持ちいいです！ はあ、もつと……奥まで！」

挿入したうえでもう一度挿入を味わえるという快感。肛門から挿入されたために、怒張が子宮に届くことはないのでもどかしいが、その不満は肉壺のほうのペニスがその都度解消してくれた。アナルにも男根が収まったところで腰を上下させてみると、菊門がペニスと擦れる一方で、ヴァギナのほうでは硬くなったクリトリスが激しく擦れる。翠の陰核はナナコのものに劣らず、非常に硬く、男根の竿の輪郭をへこませるほどだった。股間ではクリトリスから、お腹の側では子宮から、お尻では肛門から、快感が津波のように背筋を通って脳天まで押し寄せてくる。

「あん！ はあ、あん！ ああん！ すごい、あん！」

ヴァギナとアナルの両方に男根を挿入しているのだから、腰の動きが少しくらい抑制されてもいいはずだった。しかし孔の中に残っていた精液と、いまも分泌され続けている愛液が潤滑剤となっていているおかげで、腰を捻るくらいなんでもなかった。前と後ろのふたつの孔で勃起した陰茎をひたすら貪る。彼女が股間を浮かせるたび、粘り気の強い蜜がお尻と男の間にたくさんの糸を引いて、ヌチャヌチャといやらしい音を立てる。

「んはあ、はあ……っ！ あん、んっあん！」

翠が肉壺と肛門を強く締めて腰をあげれば、男の身体が浮くほどだった。それくらいヴァギナとアナルの締まりは強烈で、相手が苦悶の表情を浮かべているのはもちろん、翠もそれだけ鮮明に陰茎の輪郭を知ることができた。前と後ろのペニスと同時に張りを増したのがわかる。ならばもっと強く子宮を突けるはずだと思って、すぐ腰を振りまわす。

「気持ちいい！ あん、前も、お尻も、すごくいいです！ はあ、はあっ！」

肉体も精神もホーリーハートのはずなのに、翠は淫魔と同じように喘いでいた。精液で汚れた聖衣は重く、とくにスカートや前垂れの類が腰を引っ張ってくるが、それをものともせずセックスに耽る。ナース帽の紐リボンに精液を含んで茶髪と絡まっていた。首や腰を守っている金具の溝には牡汁が溜まっており、純白のブーツの上にも小さな汁溜まりができていく。急な丸みを帯びた巨乳は男だらけの部屋の中ではとくに目立つのか、数人の男が陰茎を乳房の傍へ寄せてきた。待っているだけでペニスのほうから近づいてきてくれ

るのがたまらなく嬉しい。

「なあ、鹿島さん。また……パ、パイズリしてくれよ」

パイズリというのがわからず、次の言葉を待っていると、ピンピンに勃起した乳首を左右に引っ張られた。

「っあん！」

そうされることでわずかに開いた胸の谷間に、下方から陰茎が一本、さらにもう一本割り込んでくる。淫魔にはわずかに劣るとはいえ相当深い溝に、聖衣の十字架模様と男根二本が難なく収まった。男性がふたり乳房の側面から腰を進ませたので、それ以上巨乳に異性が触れることはないように思われたが、さらに乳首を両方とも別の男根の鈴口で擦られる。胸の谷間で二本、ふたつの乳首で一本ずつ。一度に合計四本のペニスを相手にするという、淫魔以上に淫らなパイズリ。

「はあ、四本も……！ おっぱいに……当たって、気持ちいいです！」

翠は純白のグローブをはめた両手で早速巨乳を揉み始めた。男根を二本も挟んでいるために、ずっと球の形をしていた巨乳ですら輪郭を歪ませている。そのうえで乳首を勃起したペニスで押されているのだから、いよいよ球の形を維持してられない。二本の陰茎が胸の谷間を挟む力は強く、完全に巨乳が負けているように見えた。

「こう、ですか？ はあ……はあ！ こ、こうでしょう？ あん！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまっています。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!